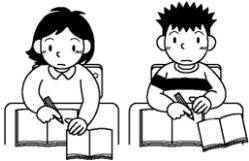


長崎市立南長崎小学校
令和3年9月2日



「発達障害」とは

「障害」と聞くと、多くの方が抵抗をもつと思います。

私は昔から視力はよくて遠くの物がよく見えていました、けれどもいつの頃からか近くの文字が見えにくくなり、近頃は裸眼では、新聞が読みづらくなってしまいました。これも「障害」なので、私は「障害」があるということになります。

そう考えると、人は誰でも、大なり小なり「障害」をもっていると言えます。

「障害」とは、その人がもつ「困り感」のことです。私は、眼鏡をかけることで「困り感」が減ります。足に「困り感」をもっている人は松葉杖や車椅子が、耳や目の不自由な人は補聴器や白杖が、眼鏡同様に支援のためのアイテムになります。

「発達障害」もこれと同じです。本校でも、特別支援学級（なかよし、くすのきあおぞら）や通級指導教室だけでなく、通常学級においても様々な方法で支援を行い、「困り感」を少しでも軽減することで、「一人ひとりが輝き、安心して生活できる学校づくり」を目指しています。

「発達障害」は、一般的に、「自閉症スペクトラム（ASD）」「LD（学習障害）」「ADHD（注意欠如・多動症）」「軽度の精神発達遅滞」などの総称として使われている言葉です。

これまで、LDやADHD、高機能自閉症のことを「軽度発達障害」と呼んでいた時期もありますが、子どもたちに対する適切な対応がなされない場合に、しばしば重篤な「二次障害（身体症状・精神症状などからくる不登校や引きこもり、暴言・暴力などの他傷行為、自傷行為など）」が起こることがあったため、必ずしも「軽度」な障害ではないことから、「軽度」という言葉を使わなくなりました。

周囲の大人に「発達障害」に対する正しい知識がないと、全般的に顕著な発達の遅れがない場合には、障害があるとは思われないケースが多くあります。そして、「わがまま」「乱暴」「学習意欲（やる気）がない」「親の躾（しつけ）ができていない」などと思われ、適切な配慮や支援が行われずに過ごしていることがあります。また、理解されないことで、学校や家庭では、「叱られてばかり」になってしまいます。

その結果、子どもたちの自尊心が低下し、先に述べた「二次障害」につながる可能性が出てくるのです。一度、二次障害が起きてしまうと、周囲の目はより一層厳しくなり、新たな障害（三次障害）を引き起こすという悪循環に陥ることも考えられます。

これらのことを踏まえ、学校や家庭はもちろん、地域においても、子どもたちのもつ障害についての正しい理解が進み、適切な配慮や支援が早期に行われることがとても大切なことですので、必要不可欠だと言えます。

裏面に続く

「特別支援学級」「通級指導教室」について

「多様で柔軟な仕組みの整備」「連続性のある（多様な学びの場）の準備」が、特別支援教育には不可欠ですが、本校にも通常学級（1～6年）のほかに、3つの特別支援学級（なかよし、くすのき、あおぞら）と1つの通級指導教室があります。

特別支援学級の子どもたちは、3つの学級にそれぞれ在籍し、学習可能な教科の時間には、交流学級（通常学級）で友達と一緒に学習を行います。

これに対して、通級指導教室は、通常学級に在籍する子どもを、週1～2時間程度迎え入れて、個別支援を行っています。

それぞれの教室では、子どもたちの特性による困り感の改善や克服に向けて、一人ひとりの状態に応じた支援・指導が行われています。

例えば、LDと呼ばれる「学習障害」の子どもたちは、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」などに困り感を持っています。（一部の能力に困り感がある場合が多いです。）

そこで、それぞれ、どこに困り感があるのか、その要因を明らかにした上で、子どもに合った指導内容や方法を決めていきます。

また、対人関係や社会性に関わる困り感を改善したり克服したりするために、「ソーシャルスキルトレーニング」などを、必要に応じて行っています。

さらには、不安な気持ちやイライラなどを発散したり、リラックスさせたりすることを目的としたゲームや運動も行っています。

家庭や学級だけでは、少し難しい支援・指導の内容を行うことができるのが、特別支援教室、通級指導教室なのです。

※ 「ソーシャルスキルトレーニング」とは

社会（学級集団）の中で、人と関わりながら生きていくためには多くの技能が必要です。その技能を身に付けるための練習学習が「ソーシャルスキルトレーニング」です。

「ゲームのルール」を例に取り上げると、コミュニケーション能力に困り感をもつ子どもたちは、

- 周りを見てそれに合わせるのが苦手。
- ルールは守らなければならないと注意されても同じことを繰り返す。
- 暗黙の了解などが理解できない。

という場合が多いです。

そこで、

- ① ゲームは「負ける」こともあるということを知る。
- ② 負けてもゲームを楽しむという感覚を身に付ける。
- ③ 負けて悔しくても、自分の感情をコントロールする。

など、スモールステップで学習を進めていき、学校生活・社会生活に必要な様々な力を身に付けさせていくのです。

